

企画名：「共同研究のすすめ：ブラジル地域研究における Cross-region×Collaboration の実践を通じて」

企画責任者：新川匠郎（上智大学）

アドバイザー：舛方周一郎（神田外語大学）

日時：平成 31 年 2 月 16 日（土曜日）午後 1 時 00 分より午後 5 時 20 分まで

場所：AA 研マルチメディア会議室（304）

プログラム：

オープニング・セッション（13 時 00 分～13 時 50 分）

司会：奥田 若菜（神田外語大学）

開会のあいさつ：太田 信宏（東京外国語大学）

趣旨説明：「異なる地域研究者たちの比較と協働」新川 匠郎（上智大学）

基調講演：「ブラジル地域研究からのクロス・リージョナルな協働研究の可能性」浜口 伸明（神戸大学）

プレゼンテーション・セッション（14 時 00 分～15 時 30 分）

司会：奥田 若菜（神田外語大学）

報告①：「理論・事例分担型の共著・協働研究のすすめ」舛方 周一郎（神田外語大学）

報告②：「移民研究におけるクロス・リージョナルな協働：ブラジルと日本間のトランスナショナルな移動」メイレーレス・グスターボ（神田外語大学）

報告③：「文理横断型の共著・共同研究スタイル」石丸 香苗（福井県立大学）

各報告者へのコメント：矢澤 達宏（上智大学）、岸川 毅（上智大学）、奥田 若菜（神田外語大学）

ディスカッション・セッション（15 時 40 分～17 時 20 分）

司会：新川 匠郎（上智大学）

院生によるラウンドテーブル：相原 由奈（東京外国語大学）、今城 尚彦（東京外国語大学）、白石 香織（上智大学）、重田 実麗（上智大学）、原口華奈（神戸大学）

報告者 3 名のコメント返し：舛方 周一郎（神田外語大学）、メイレーレス・グスターボ（神田外語大学）、石丸 香苗（福井県立大学）

全体討論

閉会のあいさつ：新川 匠郎（上智大学）

実施報告：

本企画は異なる地域を対象とする研究者の比較・協働の仕方について理解を深めることを目的としていた。これまで地域研究者には、学際的な観点から国外情勢を深く理解するため、特定地域への高い専門性が求められてきた。この研究系譜には、欧米モデルの単線的な近代化論や普遍的な命題を支える事例として地域を扱う定量的な研究への批判も含まれていただろう。だが、この姿勢とは、グローバル化が進み「一地域・一研究者」で解決困難な問題に直面する中で、世界の諸地域に開かれているはずの地域研究者を各々の地域へ過度に没入させる一因となっていなかっただろうか。そこでは地域研究者による地域分業がグローバルな理解を妨げうるものであると批判されることもある。

本企画の狙いはしかしながら、地域研究者がそれぞれの地域についての固有の知を獲得すること自体について批判、否定するものではなかった。むしろ本企画では、固有の知識をもつ研究者間の共通の話法が専門特化の中で失われてしまうことを問題意識として有していた。そこでは、地域研究での「比較」・「協働」の実践についてひも解くことで、研究者間の共通の話法を考えることを狙いとしていた。

この共通の話法を探るための取り組みの背景については、企画の趣旨説明において紹介された（新川匠郎「異なる地域研究者たちの比較と協働」）。具体的に本企画は、地域研究がその特徴において包括的であり、「比較」と「協働」の高い可能性を持つことに着目したことで生まれていることが述べられている。例えば地域研究は、暫定的に区切られた絶え間なく動きうる「場」に関して研究して、それぞれの地域の個別性に隠された論理・普遍性を探求する。他方で地域研究とは、人と同時に人でないものも対象にする特徴をもち、様々な研究者が集まる学際的な空間でもある。こうした固有の場についての研究という特徴をもつと同時に、開かれた場としての特徴も地域研究が有しているために、「比較」と「協働」の可能性は常に存在してきたと考えられるのである。

ただし可能性があっても、その実践は容易でなかっただろう。一方で「比較」については、これまで地理的に近い対象国を専門とした「地域内比較」や各地域の文脈を超えた命題に取り組む「地域間比較」は行われてきた。だが地域内比較は地域間での差異を適切に示せていたのか。あるいは地域間比較では各地域内の多様性を蔑ろにしていなかっただろうか。こうした問題点は、地域の相違点と共通点に目を向けつつ、文脈と各種条件の複雑さを考察するクロスリージョナルスタディー（cross-regional study）の方法論に注目が集まるようになった一つの契機と考えられる。ただし、こうしたクロスリージョナルスタディーはいかに実践されうるのか。「地域内比較」などに比べて蓄積が少ない中、その研究レパトリーについて考えることへも大きな関心が寄せられてこなかったように思われる。

他方で「協働」に目を向けると、研究上でのチームワークについて考えるために重要と述べられる一方、他地域との比較研究が誕生する契機になるとも指摘されている。ただし「協働」の過程で、異なる学問的立場（ディシプリン）から分析すると意見の対立がありえる。そもそも地域研究では自己の中でディシプリンとの距離感を考えなければならない。その

中で、ディシプリンが遠い他者との「協働」作業になると、まとまった見解を得るのが難しく、本当に発見すべきことを見失うリスクを孕むと考えられるのである。また研究主導者の見解が押し付けられる、面倒な仕事を押し付けられるだけ等の問題も「協働」作業に付随するだろう。では地域研究において、異なるディシプリンをもつ研究者といかに関係が実践されるのだろうか。このレポーターについても議論しなければならないことが未だ多く残されているように思われる。

以上を踏まえて本企画では、比較と協働を包括した「共同研究」のレポーターについて、ブラジル地域研究者の実践例を中心にして議論を深めることを試みた。これは、本企画の基調講演でもあったように、ブラジルが「課題先進国」と位置付けうる国であり、多岐にわたる比較と協働の試みがこれまでもあったことに起因する（浜口伸明「ブラジル地域研究からのクロス・リージョナルな協働研究の可能性」）。

そして、その比較と協働の過程、具体的には研究方法計画から研究成果のアウトプット（執筆・発表）に至る手続きについて、3名の報告者の実践を踏まえた論点提起がなされている。まずディシプリンが相対的に近く「協働」が行いやすかった一方、地域間と地域内の双方に目を向けるクロスリージョナルスタディーの「比較」の難しさを内包していた場合についての報告が行われている。そこでは、理論と事例の分担がなされた研究例が示されている。その中では、研究段階が進むにつれて次第に協働の色彩が強くなっていったことが提起された（舛方周一郎「理論・事例分担型の共著・協働研究のすすめ」）。

次に地域内よりも地域間の関係に力点を置くことでクロスリージョナルスタディーの「比較」の難しさが緩和されている一方、ディシプリンにばらつきがあり「協働」の問題が大きくなった場合についての報告が行われた。ここでは、研究の初期段階において「協働」の色彩が強く、研究の後期の段階では個人で行う作業が増えたという第一の報告とは異なる比較協働の特徴が示された（メイレーレス・グスターボ「移民研究におけるクロス・リージョナルな協働：ブラジルと日本間のトランスナショナルな移動」）。

三つ目に、地域内に分析の焦点を合わせることで「比較」がより円滑になりやすかったものの、文系と理系というディシプリンでの違いが大きかった「協働」のケースについて報告が行われた。この報告では、研究の初期段階で「協働」の色彩が強く後期の段階で個人の作業が増える比較研究のプロジェクト、逆に後期の段階で「協働」の色彩が強くなる比較研究のプロジェクト、という二つのパターンについて文理横断という視角からの紹介が行われている（石丸香苗「文理横断型の共著・共同研究スタイル」）。

これらの報告に対しては、それぞれの「比較」と「協働」の両側面に焦点を当てた討論が行われており、その課題と可能性が浮き彫りになっている。具体的には、異なる地域と比較する際の難しさとその克服について、トランスナショナル研究と比較研究の接点について、そして異なるディシプリンをもつ研究者との協働マナーの共有について、討論者それぞれの実践も踏まえながらの指摘がなされた（矢澤達宏、岸川毅、奥田若菜「各報告者へのコメント」）。

また基調講演、3名の報告、そして討論を踏まえて、それぞれの地域の研究に従事する5名の大学院生による「比較」と「協働」のディスカッションが行われている。そこでは5名の間で具体的にいう「比較」と「協働」のプロジェクトは何かについて考えることを通じて、問題提起がなされている。具体的には自らの役割認識の仕方や複数人を擁するプロジェクトの進め方が論点として挙げられていた。ここで出てきた指摘は、たとえ研究キャリアが浅かったとしても、「比較」と「協働」を行うためには何が重要であるのかを考える上での有益な問題提起であったろう。この点は、ラウンドテーブル後に行われた「報告者3名のコメント返し」および「全体討論」で活発な議論がなされていたことから裏付けられる。

以上、「共同研究」のレポーターについて理解を深める本企画から見てきた課題としては、今後も「共同研究のすすめ」について真正面から取り組む必要があるとの点を挙げられる。具体的には、様々な地域の研究に従事する研究者の間で共有可能な「共同研究」のガイドラインを考えるために、引き続きの更なる情報共有と蓄積が必要であると考えている。また「共同研究のすすめ」とは単に博士課程を終えたような研究者のみならず、大学院生なども対象にした教育的な性格も持ち合わせている必要があると本企画の「院生によるラウンドテーブル」を通じて認識している。そのため、今後も定期的に大学院生なども含めた「比較」と「協働」に関するワークショップを開催して、「比較」と「協働」に関する指針を考える上でのノウハウの蓄積、それをアウトプットしていくことが必要であると考えている。